

かささぎ 通信 第57号

2017年 6月 9日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一七年五月の「森三郎の作品を読む会」では、「赤い鳥」昭和11年10月号（鈴木三重吉追悼号）に所収の森三郎作品の一部を読みました。

「鈴木三重吉追悼号」に掲載されている森三郎作品は、次の九作品です。タイトル（分類） 作者名義の順に並べてみます。

たんぼ（童話） 森三郎、胡桃（童話） 茅原順三、鸚鵡（童話） 辻乙四郎、つむじ風（童話） 笹塚一二、三味線橋（童話） 小林七葉、写真機（童話） 小松淑郎 兎ちゃんとキヤベツ（童話） 村尾茂、

鳥瓜（童話） 早川七郎、珊瑚ちゃんへの志願（赤い鳥の歴史） 森三郎
今回は「たんぼ」から「つむじ風」までを読みました。中でも「たんぼ」は、「毛糸」「木鼠をばさん」「たんぼ」「人形」の四つの作品からなっています。小さな十日鼠がおばさまに頼まれて町の糸屋さんへ毛糸を買いに行く話、森の木鼠おばさんが、春の女神さまの好きな胡桃のお菓子を作ってその到来を待つ話、森に住むおばあさんが、大切な人形のお婿さん探しをして、毎晩一つとところにじっとしているお星さまに決める話など、メルヘン風の話で構成されています。師・三重吉への思いを込めて、森三郎が子どもの頃から読み親しんできた『赤い鳥』らしい作品に仕立てたように見えます。「たんぼ」にはタイトルの横に（先生の御霊に捧ぐ）という献辞があります。たんぼの綿毛たちは風が吹くたびに大喜びで「とびましようよ、とびましようよ」と声をあげています。世界で一番利口な博士の家の書斎の、大きな辞書の上に舞い降りた綿毛は、辞書と婚約します。綿毛は窓から狭い空地に落ちてしましますが、二、三年後には自分の子どもたちがこの空地をたんぼの花で埋めて、明るい庭にするだろうと考え、博士がそれを見て喜んでくれる姿を想像します。

大きな辞書はまさに三重吉の遺業でしょう。先生の仕事はずっと子どもたちの心を育み明るく照らしていくでしょうという思いと、三郎自身も綿毛となってその仕事を続けて行きたいという気持ちが見えるような気がします。

追悼号は360ページという厚さ（昭和11年の1月号〜8月号は100ページ前後）ですが、「たんぼ」以外の童話は他の作家の童話の2段組みのページに比べて、3段組にし、活字も小さくしたり、空いたページに飛ばして組み込んだりと、編集記者・森三郎の苦勞の跡がうかがえます。

しかし作品には、これまで読んできた森三郎童話のおなじみの題材や表現方法が随所に見られます。「たんぼ」の中の「人形」で、長いこと待ち人の現れるのを期待して夜空の下でたたくおばあさんと、家に入るように促す人形のやり取りは「赤穴宗右衛門兄弟」（昭和6年3月号）や「とんび風」（昭和9年12月号）にも描かれていた手法です（「かささぎ通信」第51号）。籠の中の鸚鵡がいつしか、見たことのある西洋の女の人に代わっているがこれは夢であったという「鸚鵡」の話からは「うんすんガルタ」（昭和8年2月号）、「かささぎ通信」第26号）を思い出しました。そして、「つむじ風」はタイトルの横に（ローズ・ファイルマン）と書かれていて、「赤いポスト」（昭和6年9月号）や「かうもり傘」（昭和6年11月号）の原作者の話を再話したものであることが分かります。（森三郎の作品を読む会通信）第6、8号、同会誌「かささぎ」創刊号）

そこで「作品を読む会」の番外編として、「ローズ・ファイルマンの作品を読む会」を開催します。英語の原話と比較しながら、『赤い鳥』、森三郎、ファイルマンの関係をさぐります。是非ご参加ください。講師・鈴木哲氏 7月21日（金）・8月4日（金）、中央図書館

次回予定 平成29年7月14日（金）午後1時半〜3時半

『赤い鳥』に初掲載の昭和6年3月号〜12月号の

森三郎作品（本名・他の名義の物）を読み返します。